

目に見えない ものにも感謝 がんの神様 ありがとうございます

がん患者さんとの交流から見えてきた、本来の日本人の生き方とは? 最幸の愛読書である月刊誌『致知』の本年2月号より、目に見えない世界の大切さを説き続ける育生会横浜病院の長堀院長と、筑波大学の村上和雄名誉教授の対談をご紹介します。

【長堀】 これは私が10年くらい前に出会った患者さんの話ですが、その方はお腹の中にがんが広がっていました。そのことは彼女も知っていたのですが、いつもニコニコされていたんです。

彼女は75歳くらいでしたが、私が回診で病室へ行くと、私の足音で近づいてくるのが分かるようで、いつもベッドの上で正坐して待っているんです。多分どの先生にもそうだったと思うのですが、「いつもありがとうございます」と、正坐したまま最敬礼をしてくれるんです。

その顔は本当にニコニコで満面の笑みでした。私はどこからこの笑顔が出てくるんだらうか、死が怖くないのだからか、いつも不思議だったんです。ある日のこと、いつものように素敵な笑顔を見せてくれた彼女が真剣な顔つきで尋ねてきました。「先生、私は手術することもあ

って。私はその言葉にとっても感動しました。

【村上】 それは偉い方だな。

【長堀】 がんというのにも細胞であ

って、米国の細胞生物学者ブルース・リプトン博士は「細胞一個一個に、感性がある」という話をしていました。例えば単細胞のミドリムシは餌があれば寄っていき、毒が来ると逃げていく。単細胞ですから脳みそも神経もないわけですが、そういうことが全部分かる。だから博士は「細胞はそれだけで完璧な生命体である。しかも生きる感性を持っている」ということを言っているんです。

【村上】 そうであれば、がんも細胞ですから生きる感性があるので、当然人間の思いとも関係してくる。実際、彼女は長く生きました。

【長堀】 もって一年という診断でしたが、三年半あまり生きることができた。私は彼女の思いががん細胞に届いたのだと思っています。

【村上】 つい最近、工藤房美さんという方が本を出しているのですが、この方は末期がんだったんです。医者に診てもらった時はもう既に手遅れで、余命一か月と宣告されたんです。彼女には三人の息子がいたのですが、それぞれに遺書まで書かれていたのですが、私の本を差し入れた方がいたんです。それを読んで彼女が、細胞一個一個にお礼

を言い始めたんです。がん細胞にも「ありがとう」と十万回唱えた。

【長堀】 どうなりましたか。

【村上】 何と十一月で完全に消えたんです。がんが。アンビリバブルとしか言いようがありません。人の思いとか感性で遺伝子にスイッチが入るエピソード(証拠)を、私は読者の方から教えてもらいました。

【長堀】 あとはそこに法則性が見つかれば、これはもう立派な科学になります。私の外来にも、がんが消えた患者さんがいます。その方もいつもニコニコして来られます。ですから村上先生の言われたように、人の思いががん細胞に伝わるんですね。

【村上】 工藤さんの話で私がすごいと思ったのは、彼女は「がんを治してください」とはひとことも頼んでいないことです。がんも自分の体の細胞の一部なんだから、「いままでよく頑張ってくれたね」と、むしろ感謝している。そういう思いが体に、細胞に、遺伝子に影響を与えたということですね。

【長堀】 東洋には「同治」という言葉があって、病気が消えなくてもいい、病気とともに生きていこうという態度のことです。それに対応する言葉に「対治」という

があつて、これは病気を消してやろう、闘ってやろうという態度です。

鈴木秀子先生が奇跡的に病気の治る人の特徴として、「愛」「感謝」「受容」という三つを挙げています。そのうちの「受容」というのが、「あつてもいいんだ」「闘わない」という姿勢で、「同治」に繋がる考え方だと思います。

【村上】 医者に頼るのではなくて、患者にもできることがあるわけだ。

【長堀】 そのとおりです。自立した思いというのがとても大切だということを、私は「がんの神様」から教えてもらいました。

〜中略〜

【村上】 外国に行くと、「おかげさまで」と言う、「何のおかげですか?」って聞き返されます。目に見えないところに感謝すること、それが「おかげさまで」という言葉に表れているんですね。

【長堀】 日本人というのは、そういった見えない世界を崇拝してきた民族なんです。そしてこの「おかげさまで」があるから、「仕方ない」という言葉も出てくる。大いなる力に任せているのですべてを受け入れますという意味で、さっきの「受容」にも繋がる。私はこの二つの言葉が日本人の強い生命力を支えてきたと思うんです。

【長堀】 サン・テグジュペリも『星の王子さま』で、「一番大切なものは目に見えない」と言っているように、私たちは目に見えないものを豊かにすることに、もっと意識を向けた生き方をしたいかなければいけないと思いませんか。

【村上】 「がんの神様」にありがとうと言えらうくらい心の豊かさを、私たちは取り戻さなければいけないのかもしれないですね。

愛する(笑)「博多の歴史」白駒妃登美さんもがんを克服したお一人。肺に転移して余命宣告を受け、絶望のなか、力を与えてくれたのは正岡子規の「痛くても苦しくても生かされている」という一瞬を平然と生き切るという武士道の覚悟、その生き方だったそうです。過去も未来も手放して、今ここに全力投球。そうすると扉が開いて次のステージへ上がれる。そんな天命に運ばれていく生き方をした日本の先人たち。悩みのほとんどは過去の後悔。時間軸を「いま」に、地点を「ここ」に合わせたら消えたのは悩みだけでなく、奇跡的にがん細胞も全部消えたといえます。子どもたちへの遺言として書いた書籍が話題となり、今では天命として全国で数多くの講演活動をされています。

〜中略〜

(おわり)

人の心に光を灯す

ラジオで聴いた
若いOLの話である。

彼女の生家は代々の農家。
もの心つく前に
母親を亡くした。
だが、寂しくはなかった。
父親に可愛がられて
育てられたからである。

父は働き者であった。
三ヘクタールの水田と
二ヘクタールの畑を
耕して立ち働いた。
村のためにも尽くした。

行事や共同作業には骨身を
惜しまず、ことがあると、
まじめ役に走り回った。
そんな父を彼女は
尊敬していた。

父娘二人の暮らしは
温かさに満ちていた。

彼女が高校三年の
十二月だった。
その朝、彼女は
いつものように登校し、
それを見送った父は
トラクターを運転して
野良へ出ていった。

そこで悲劇は起こった。
父は居眠り運転の
トレーラーと

衝突したのである。
彼女は父が収容された
病院に駆けつけた。
苦しい息の下から
父は切れ切れに言った。

「これからは
お前一人になる。
すまんなあ……」
そしてこう続けた。

おかげさま お守りに 生きていく

「いいか、これからは
おかげさま、おかげさま
と心で唱えて生きていけ。
そうすると必ず
みんなが助けてくれる。
おかげさま」を
お守りにして生きていけ
それが父の最期だった。

父からもらった
「おかげさま」のお守りは、
彼女を裏切らなかつた。
親切にしてくれる村人に
彼女はいつも
「おかげさま」
と心の中で手を合わせた。

彼女のそんな姿に
村人はどこまでも
優しくかつた。
その優しさが
彼女を助け、支えた。

父の最期の言葉が
彼女の心に光を灯し、
その光が
村人の心の光となり、
さらに照り返して
彼女の生きる力に
なったのだ。

「心に響く小さな5つ物語」
（致知出版社書籍、人気ラ
ンキング一位）より

お金の

お背中を流す

大震災の年、2011年
に公開された村上和雄博士
のドキュメンタリー映画、
「SWITCH〜遺伝子が
目覚める瞬間」。人間の遺
伝子には、1000文字×
1000ページの百科事典
約3200冊分の情報が入
っているが、生涯、その数
%しか使っていないという。
その「眠っている遺伝子の
スイッチをオンにすれば、
人間の可能性は無限大だ」
と村上博士は語る。

自主上映会に参加、企画
・監督をされたサンマーク
出版の鈴木七沖編集長と出
逢い、村上博士の貴重な講
演を拝聴する機会にも有難
く参加、今日までの多くの
素晴らしい方との出逢いに
つながっています。今年ほ
ぜひ、映画「SWITCH」
の上映会を開催したいと思
います。その鈴木七沖編集
長のフェイスブックでのス
テキな投稿をご紹介します。
……

境内を歩きながら、むか
し聞いたこんな話を思い出
しました。
「お金のお背中を流す」話。
感銘を受けて一時期、僕も
実践していました（効果あ
りました！）。

話してくださったのは、
当時（10年くらい前）、還
暦を過ぎて定年を迎えたい
ばかりの、大企業に勤めて
いた人生の先輩でした。あ
えて「先輩」と呼びます。

先輩は毎晩、自分がお風呂
呂に入るときに、小銭入れ
の中にある小銭をすべてお
風呂場に持っていくのだそ
うです。そして、たらいの
半分くらいにキレイなお湯
をはり、そっとその中に小
銭を……。

七沖「小銭を入れるんです
か？ たらいの中に？」
先輩「はい。入れます。そ
の日の小銭を全部入れます」
ちよつとだけ石けん（無添
加のもの）をつけた小さな
専用スポンジを用意して、
左手で持った一枚の10円玉
を、右手のスポンジでゆっ
くりゴシゴシと洗います。

先輩「お背中をね、流すの
です」
七沖「えっ？ なんですか？」
先輩「お背中」
七沖「お、お背中あ？」
先輩の手にある10円玉
は、人の手から人の手へ、
ほうぼうの場所からほうぼ
うの場所へと旅を重ねて、
重ねて、今まさしく先輩の
手の平にのつかっています。
明日以降は再び旅の生活。
ここから離れて、どこへや
ら。旅鳥の10円玉さんよ。

先輩「1円玉、5円玉、10
円玉、50円玉、100円玉、
500円玉……それぞれに
旅の行程は違います。優し
くされてきたものもあれば、
投げるように使われたもの
もあるでしょう。せめて私
のところへやってきたご縁
なら、どうぞいっしょにお
風呂につかりながら、ゆっ
くりと旅の労をねぎらって
いただきたい」

七沖「ほつ。いい話です
ね」
先輩「続きがありますよ。
続きが……」
毎日、毎日、小銭をキレイ
にしては見送ってきた先輩。
ところが、ある日、先輩の
ところに訪問者がやってく
るようになったとか。

先輩「あまり意識しちゃダ
メなんですがね、小銭たち
の親が、どうも頻繁に、私
のところへやってくるよう
になりました……」
七沖「小銭の親？」
先輩「1万円です。いちば
ん偉い親」

小銭たちをキレイにしてい
る先輩の姿に感動した小銭
たちの親（1万円）が、御
礼参りに来るというのです。
いろいろな理由をつけて。
七沖「お、お子どもたち
がお世話になっております。
どうぞ、お礼に、私をお使
いください」と。

僕も息子がお世話になっ
た方には、しっかりと御礼
が言いたくなります。感謝
の想いが湧いてきます。お
金様だって、きっと同じな
のでしょ。 （おわり）
=====

第二の人生の スタート

「独立して新しい夢をかな
えたい！」そう父に相談し
たときのことだ。当時、父
は60歳。38年間勤めた食品
衛生関係の仕事を引退した
ばかり。私の真剣なまなざ

しに、「何でも精いっぱい
やったらいい。応援すっか
ら」とエールを送ってくれ
たあと、「実はオレにも夢
があるんだ」と思いがけな
いことを口にした。

夢は2つ。1つは学校の
先生になること。もう1つ
は、50代から勉強し直して
きた英会話を駆使し、海外
からのお客様向けのバスガ
イドになるという夢だった。
1つ目の夢に向かい、猛勉
強を開始した父はその1年
後、東京の製菓専門学校
の先生になった。

専門書を読み込み、徹夜
で授業の準備をする。無心
に机に向かう父の身体を気
づかうと、「一生懸命、夢
をかなえようとしている学
生さんたちに教えるという
ことは、その学生さん以上
に勉強しないとね」と笑っ
た。

第二の人生のスタートを
切った父のイキキとした
姿は、ミドルシニアである
私の目標だ。リタイアし、
隠居する時代はどうに過ぎ
た。新年を迎え、暖冬のや
わらかい日差しが当たる今
は亡き父の本棚に、本屋さ
んのカバーがかけられた手
つかずの本が並んでいる。
カバーを取ると、英語で書
かれた日本のガイドブック
が数冊と、外国人に歌のプ
レゼントをと考えたのだろ
う、唱歌の本。2つ目の夢
の実現のために準備してい
たんだ（！）と、胸が熱く
なった。

60代は、第二の人生をス
タートさせる世代だという

ことを、再認識させられた
新年だ。 （おわり）
（日経MJ シニアおもてなし
スケッチ 接客アドバイザー
キーワード 北山節子）
=====

母のバッグに 40年前の手紙

母が施設に入り、住む人
がいなくなった実家を取り
壊すことになり、片づけで
田舎に帰った。

母の思い出の品が次々と
出てくる。と、見覚えのあ
る藍染めのバッグが見つか
った。バッグ作りをする友
人に頼み、和装用に作って
もらったものが、タンスに
あったのだ。

40年前の母の日に贈っ
たバッグ。今でも十分使え
るので、持って帰ることに
した。
自宅でバッグを開け、フ
アスナー付きの内袋をのぞ
くと、何か紙切れが見える。
出してみると、それはバッ
グを贈ったとき、私が書い
た手紙だった。中学生や高
校生だった娘たちの近況を
知らせた内容の手紙は、贈
った時の封筒からは出され、
きちんと四つ折りにして入
っていた。

この手紙を入れたまま使
っていてくれたのだ。子を
思う親の気持ちがありがた
く、涙が止まらない。10
7歳になる母に今すぐ会い
たくなつた。
読売新聞投書欄「ぷらぎ」
（鎌倉市・村上さん73）